

⑤【N生の具体的な姿】N生は「続けない派」の関連発言で、「私は続けないという考えです。今のまま世に広めると（現在の高山村の栽培量や種類）だと高山村のワインへの好き好きがでると思う。



でも、新しい人が入ればその人のアイデアでいろんな人の好みにあったワインが作れて、もっと高山のワインが好きだという人が増える。でも今のまま振興を続けても、高山のワインが好みでない人は見向きもしてくれない振興になってしまうからです」と述べた。その後の「もっと工夫していけば続けていい派」の発言を聞いている中で、挙手をして「さっきワインの試食会を開くって言ったけど、それだけじゃなくてワインぶどうだけで実際に食べてもらったり、収穫体験をしてもらったりすればいい（栽培農家が増える）と思います」と述べた。そして、課長さんのお話を聞いた後で、N生は挙手したが指名されなかった。振り返りには「村もいろんな工夫をしているので、今やめてしまえば、今までやってきたことが無駄になってしまう。もっと大きく発展させて、さらによりよいものにしていくことが大切で、村としての課題だと改めて感じた。この村はワインぶどう栽培に適しているのだから、それを生かしていくのが大切だ。続ける価値がいっぱいあることが分かったので、意見が変わりました」と記した。

⑥【N生の見方・考え方の深まりの考察】N生の始めの見方・考え方は「今の新規参入者が増えていない現状

（栽培量や種類）のまま振興しても、ワインの好みに対応しきれない。だから続けない」だった。話し合いにおける「もっと工夫していけば続けていい派」の意見の中で出された「栽培農家を増やすための工夫として、兼業農家への説明、地道な試飲会、補助金交付」などの意見を聞いている中で、N生自身も栽培農家を増やすための工夫を考え、自らも増やすための考えを発言していく。さらに、その後に続いた友の「高山村はワインぶどうを作る環境(ワインぶどう栽培に適した自然条件等)が非常にいいということをもっとPRすれば栽培農家が増える」という考えや産業振興課の課長さんのお話を聞き、「村の今までの工夫の大きさ・さらによりよいものにしていくことが村の課題であること・高山村のワインぶどうの適地性」などを「続けていく価値」と考えて意見を変えていった。その姿に、他人ごとではなく「私の村、高山村」という意識が表れており、社会的な見方・考え方の深まりを見いだすことができる。

(2) 事例から明らかになったこと

- ① 思考判断型の学習問題を単元の終末に設定することで、それまでの調査体験によって培われてきた知識や技能が総動員され、自らの考えを補強したり、修正したりしながら、最終的な自分としての判断をする中で、社会的な見方・考え方が深まる。
- ② 総合的な学習の時間を使っての調査活動も含めて、ワインぶどう栽培に携わっている方や役場の担当の方のお話を聞く調査・体験的な学習をすることで、子どもたちは社会的な事象を自分のこととしてとらえやすくなり、「私の村のワインぶどう栽培」という意識が深まり、意欲的な学習につながる。
- ③ 子どもの考えを把握した上で指名計画を立てたり、個や全体へのつける力に関わった問いかけや問い返しをしたりしていくこと（本時では、「振興の是非」から「さらなる工夫」への話し合いの転換を図る全体への問い返し）で、視点が整理されたり、転換されたりして、つける力がついていく。

4 来年度への課題

* 来年度も授業者の課題にそった研究を主としていく方向でいきたいが、社会科委員会の授業を信州社研上高井大会（10/28,29）での公開と兼ねる方向で研究を進めたい。そこで、授業者の課題に下記の点を加味して研究をしていきたい。

- (1) 調査、体験的な活動（学習体験）による確かな事実認識のあり方
- (2) 検証資料への必要感をもった関わり方（ゲストティーチャーとの関わり方を含む）
- (3) 人々の営みを支えている思いや願いへの関わり方（検証資料内容のあり方を含む）

5 その他（教育課程研究協議会との差異を意識する観点から）

- (1) 研究会では、研究内容の1から4に沿って小グループ討議をし、小グループ毎に話し合われたことを画用紙に書き、それを見合う時間をとった。その後、共通討議事項を絞って全体討議の時間をとった。今回の方法は参会者から好評だったので、来年度も参考にしていきたい。
- (2) 講師については、今年のようにその地域のことを教えていただけるような方をお願いしていく方向がよい。